

「ホメロスの社会的 *Tyrt* 概念について」

——叙事詩の成立期を中心として——

柳 鶴 優 子

(1)

time (*Tyrt*) という語は一般に、「名譽・名声 (honour)」と訳される。Liddle & Scott⁽¹⁾ には、始めに「代償 (price)」、「(物の) 価値 (worth)」という意味が出ている。更にこの語は、「罰金 (penalty)」という意味をもっている。W・ヘッチャーは、*time* を *moira* や *themis* と共に古代ギリシア社会における秩序概念 (Ordnungsbegriffe) とし、⁽²⁾ ホメロスの叙事詩の中での各々の働きについて、論文を著した。A・W・アドキンスは、この *time* のもと概念を叙事詩において慎重に検討することで、ホメロスの社会を生き生きと描き出している。⁽³⁾ 彼らの *time* に関する概要は次の通りである。

ヘッチャーは、*time* という秩序概念を貴族の間で生まれた貴族階級の概念であると考えた。*time* は一つの *meros* (分け前)、一つの *moira* (配分) であり、*areté* (武勇) や *bia* (勢力) の結果によってもたらされる尊敬や称賛である。また、生まれや

物質的優位さへの称賛でもある。その基礎は、その人の *areté* であり、*time* の減少はその *areté* によって回復されねばならない。*time* は神々も人間も所有しているが、ただ神神の方が人間よりも多く所有し、その効果は大である。⁽⁴⁾ 以上がヘッチャーの見解である。彼はこの概念に関して、一般の人々への言及をしていない。勿論、全く無縁であったとは考えていないだろう。ただそれが一方的な上からの押し付けられた考え方なのか、それとも最初はそうであったが次第に浸透していったのか、そして浸透していったのならどの程度浸透し、それによって *time* という概念に何か変化が生じたのかどうか、彼は述べていないのである。⁽⁵⁾

アドキンスの見解はヘッチャーの説と一致する点が多い。

agathos, *esthlos*, *aristos* と呼ばれるホメロスの戦士達ヘッチャーの述べる「Adel」と同義であると考えられるので、以降「貴族」と著す)の特権は、戦いにおける彼自身の *areté* にかかっており、それは *time* という語によって称賛される。この

他に、*time* は生まれや物質的優位さへの称賛でもある。これは具体的には *oikos* (家屋敷・土地・山羊、豚等の家畜・財宝・動産・召使等) であり、その質・量・大ききによって社会でのその所有者の地位が表わされる。彼らは *oikos* を維持、増大させていかなければならないわけであり、それが *time* という言葉にかかる感情的負担 (the emotive charge) である。従って、彼ら貴族達は *arete* を充分に發揮して *time* を得、そうすることによって、*agathos esthlos* と呼ばれることをより確固なものとすることができるのである。そして彼らはその過程では、敵と戦うだけでなく、味方の他の貴族達とも張り合うことになる。*time* とは、人間よりも多くの *arete* と *time* をもつ神々を最高とし、自分自身では *time* をもたず、他の人々によって与えられる立場にある、家のない放浪者や乞食を最低とする尺度 (scale) の、その人の「位置」である。更にアドキンスは次の様に述べている。人を *timan* するということは、放浪者や乞食といった者から、その人物を更にずっと遠ざけることであり、人を *atiman* する(9) ということは、彼らの方へその人物をずっと近づけることである。以上、アドキンスの説はペッチャーの説よりも詳細であるといえる。*time* の特徴について、アドキンスは貴族達をその対象として考察している。ペッチャーと同様に、貴族階級のものという印象が強い。両者とも「生まれの良き」という点が挙げられている。戦場において勇敢に戦うことや、財産の豊かさを指摘して、歩兵等の一般の戦士と *time* を関連させて考察している箇所は

ない。*timan* や *atiman* といった動詞の解釈についても、アドキンスが放浪者や乞食(彼らは *time* を持たない者、*atimetros* と呼ばれる) を引き合いに出していることから、ただ単に侮辱的な調子を出していると考えられることも出来る。動詞の対象となっているその人物よりも、社会的・経済的に少し上位にある者達や、少し下位にある者達を強いて意識する必要はないと考える。しかしながらこれをアドキンスの説に従って「社会的な尺度」と関係させてみると、*time* という概念が明らかになってくる。つまり、尺度の上でその人物を上げたり、下げたりする働きが、二つの動詞にはあるのではないだろうか。これは試みではあるが、そのように考えることによって「尺度」という言葉がもつ意味を充分に理解することができる。すなわち、放浪者や乞食以外は全て *time* を所有し、その質・量・大ききによって社会でのその所有者の地位が表される、と想定することができるのである。

time という名詞は『イーリアス』においては二十三回、『オデュッセイア』においては十一回出てくる。その所有者は、ゼウスやアガメムノン、アキレウスやオデュッセウスなど神々や貴族である。一カ所伶人のデーモドコスの所有として出てくるが、コンテクストから、伶人は普通の人々とは全く違う者なのだ、ということが読み取れる。(9) 「一般の人々の *time*」というものは、一回も出てこない。ましてやオデュッセウスの豚飼である「エウマイオスの *time*」というものは無い。が、彼は住む小屋と四

人の奴隷をもち、放浪者に分け与えてやるだけの食物も貯えてある。それらは彼の財産、*time* である。「尺度」の上では、エウマイオスは放浪者や乞食よりも少しは上位に位置を占めていると想定することができる。*time* という語には、「(王の) 權威」という意味もあり、貴族階級の人々個々の語であるようだが、その語のもつ概念は、今まで見てきたように、観念的な意味で把握すべきであると考える。

(2)

ベッチャーもアドキンスも、*time* はその人の *arete* にかかっている、と述べている。そしてこの場合、両者共に「その人」とはあくまでも、戦場においては甲冑、兜に身を固め、大盾、槍を携えて戦車から降り、勇敢に戦い、会議の場においては、弁舌爽やかに当を得た発言をする者を描いており、その人物像を念頭に入れて、彼の属性を彼に対する称賛の理由として列挙している。しかし前述したように、「その人」とは一般の人々、つまり平民についても言えるのである。そうした場合、上述した貴族階級の人々の *arete* と平民の *arete* とは何か異なるところがあるのだろうか。あるとしたらどの様な違いがあるのだろうか。*arete* とは「武勇」の他に、発揮されるべき「能力」と考えられるが、平民の場合何に対して発揮されるのだろうか。更に、*time* を維持、増大させるために、貴族は戦場においては敵と戦うだけでなく、味方とも張り合うことになるアドキンスは考えた。⁽¹⁰⁾ 所し

てそれが *time* という語がもっているところの「感情的負担」であると指摘した。では、それは平民に関してはどうなるのだろうか。貴族達の「感情的負担」と平民の *time* とはどの様に関係しているのだろうか。

以上、ベッチャーとアドキンスの説から派生して、幾つかの疑問が生じてきた。本稿では、これらの問題に対して解答を見出すことが目的であるが、それには大きな制約があると考えられる。まず始めにここでは平民の *time* についての考察を行うのであるが、ホメロスの叙事詞は英雄叙事詞であるために、はっきりとした形で貴族以外の人々の様相を抜き出すのは困難であるという点がある。それ故、ベッチャーもアドキンスも、「人々の *time*」を推論し、想定するしかなかったのであり、明確に言及することについては全体のバランスから避けたのではないかと推定する。次に、「人々、あるいは平民」とは具体的にはどの様な人々を指しているのか判断しにくい点がある。原文で「*demos*」あるいは「*andres*」と呼ばれている人々は、「市民」、「領民」と訳されている。土地を所有する独立自営の農民が中心であろうが、その中に職人や商人がどの程度含まれているのかは明瞭でない。共同体成員として考えた場合、土地所有者に限定されるので、「人・平民」というのもここでは独立自営農民までをその範囲とし、職人や商人については考察の対象からは除くことにする。さて制約という問題であるが、それは人々の様相がある程度、形をもつて現れてくると考えられる場面の抽出作業で、自ずとある規定を

もって選択することになる、ということである。つまり、人々が「形をもって現れる」ということは、共同体内で強い影響力をもっているということ、既にこの段階で、ホメロスの叙事詞を狭く限定して読むことになるのである。従って結論として出てきたものを、完全な意味で「ホメロスの」と呼ぶことはできないと考える。ポリスの市民により近い像を、二つの叙事詞に登場する人人の姿の中に探し、それを考察の対象とすることになる。すなわち、時代的には叙事詞の最も新しい時期、つまりその成立期に限られる。それ故、本稿の目指すところも、ホメロスの叙事詩成立期の *time* の特徴を描き出すこととなる。

(3)

論を進めるにあたって、まず *time* とその派生動詞や形容詞が、ホメロスの叙事詞の中でどの様な意味として使用されているか、見てみることにする。

<*time*>

『イリアス』に二十三例、『オデュッセイア』に十一例ある。

物質的なものと非物質的なものに分類することができる。物質的なものは、「報復」や「代償」としての「物品」や、「戦果・戦利品」であり、非物質的なものは、神々や貴族の「権威」や「権利」、またその「社会的地位」、あるいはそれらに対する「名譽・名声」を示す。特徴的なことは、前述したように、その所有者が神々と

貴族に限られているということである。アガメムノンの *time* は、「王としての権威」であるが、これは、「ゼウスの授けた」ものとなっている。多くの *time* を所有している者は、それだけ神々に愛されている (*philotes* の関係にある) ということを示している、とアドキンスは説明している。領主としての地位そのもの、そしてそれに共なる財産、更にそれらのものを神々の恩寵の賜物であるとする信仰、この様な考え方がどれ程ホメロスの叙事詩の聴衆に浸透していたのかわからない。しかしそれは、支配する側の人々にとって「権威」を正当化する思想である。ペッチャーが *time* を貴族階級の人々の中から生まれた概念であると考えたのも、この様な経緯からであろうと推定する。

<*kein · timein · timein*>

『イリアス』において、それぞれ四十三例、二十一例、十五例、『オデュッセイア』において、十九例、八例、二十五例を数える。これらを物質的・非物質的な意味をもつ *time* の譲渡としてアドキンスは考察した。彼の説に従って動詞の意味を検討してみると、次の様である。ひとつには *time* の「授受」である。そしてその「回復」があり、更にその「強制的奪取」があげられる。物や人を「評価する」という意味をもつ。つまり、物を「値ぶみする」という場合にも、また人を「敬う、高く評価する」という場合にも使われる。 *time* の「授受」としてこれらの動詞を考えて、それが社会的にどの様な地位にある人々の間で行われてい

るかみて見ると、*timē* という名詞が神々と貴族に限定されて使われていたのに対し、動詞においては、それはあらゆる階層の人々にまで対象が広がっている。殊に最後にあげた意味は、日常的な使われ方をしており、特にこれらを社会的に考察する必要があると考える。

〈*atimēin*・*apotimēin*・*apotimēin*〉⁽¹⁵⁾

『イリアス』においては、各々十例、八例、無し、四例、『オデュッセイア』においては、各々六例、十三例、無し、二例を数える。更に〈*apotimēshai*〉は、『イリアス』と『オデュッセイア』にそれぞれ一例ある。これらの動詞の意味は、「*timē* を減少させる、評価を下げる」となり、「復讐をする」、「償いをさせる」、「つまり *timē* の「強制的な奪取」の際や、人を「侮る」という場合に使用される。前にあげた肯定の動詞と同様、日常的な使われ方をしている。

〈*atimōzōs*〉

『イリアス』において二例ある。共にアキレウスの言葉である。アガ멤ノンがアキレウスから、彼の戦利品 (*timē*) であるブリーセーイスを奪っていった事に対して、自分の身を『卑しい極みの寄寓者のよう』⁽¹⁶⁾、『よに蔑まれる渡り者であるかのよう』⁽¹⁷⁾と表している。アガ멤ノンは、彼が抵抗できないのを承知して、会議の場でのしり合い、強引に女性を奪っていった。

「*timē* を持たない者」の意味として「寄寓者」、「渡り者」という訳が当てられるが、この者を、「*timē* を奪われたのに回復する能力 (*arete*) を持たない者」と解釈することができる。

〈*atimōzōs*〉⁽¹⁸⁾

『イリアス』、『オデュッセイア』に一例ずつある。『イリアス』においては、アキレウスの言葉として現れる。⁽¹⁹⁾ アガ멤ノンによって自分の *timē* を奪われたのに、それを奪い返すことのできない我が身を「恥すべき者」として表している。『オデュッセイア』では、ペーネロペイアがアンティノオスに述べている言葉の中に現れる。オデュッセウスの館で飲み食いしながらも、『その代も払わず』と、ののしっている。『代も払』えない、つまり *timē* を払うことのできない身を、「恥すべき者」として非難している。

形容詞において解ったことは、*timē* というものが個人の *arete* に密接に関係しているということである。それはベッチャーやアドキンスが既に指摘している事であるが、次の様に解釈できる。すなわち、アキレウスがアガ멤ノンに抵抗して、*timē* を回復する能力を *arete* とするならば、アンティノオスが飲食の代を払う能力もまた *arete* と考えられるのである。つまり、何らかの行為や物品に対してその代償を払うことができたり、またそれが奪われた場合に、回復することのできる能力を *arete* と呼ぶことができるのである。そしてその様な能力は、貴族に限ったも

のではないと考えられる。

(4)

観念的な意味での「*things*」と「能力」としての「*arete*」が貴族に限ったものではなく、人々全般に行き渡った意識であることが、徐々に濃厚になってきた。豚飼いのエウマイオスが、主人であるオデュッセウスの *things* に関して述べている箇所がある⁽²¹⁾。家畜の数を列挙しているが、この様に *things* とは、家畜や館の大きさなど、目に見えて明らかなるものであった。共同体内において、どの家族が何をどのくらい所有しているのか、それ故にどのような社会的な位置にあるのか、ホメロスの社会とはこの点で非常に明瞭な社会であったと推定される。

オデュッセウスがエウマイオスに対して偽りの身上話を聞かせている箇所⁽²²⁾で、自分はクレイター島の裕福な地主の息子であったと言っている。それが航海好き、戦さ好きのために、最後には奴隷として売られてしまったが、それからやつのことで逃げて来て、乞食となった、ということである。一方エウマイオスは、シユリエー島の領主、オルメノスの子のクテーシオスの子として生まれたが、召使い女によって売られ、イタケー島に連れて来られて、ラーエルトースによって買われた⁽²³⁾。また、名高きメランブーの子孫、テオクリュメノスは、人を殺してアルゴスから追放され、占い師としてイタケー島にやって来て、テーレマコスによりペイライオスに委ねられた⁽²⁴⁾。『イリアス』においては、プリア

モス王の息子達がアキレウスによって捕えられ、売られている⁽²⁵⁾。このようにホメロスの社会は、何時災いがふりかかるかわからない状況にあった。人々は自分の命と *things*、すなわち財産と社会的地位を守ることに全力をあげていた。そしてそれは人々全てに言えることであったと考える。

自分を守る力、それは個人の *arete* である。ホメロスの時代は、牧畜・農耕社会であった。大半の民衆は牧人でもあり、農民でもあり、また戦士でもあった。近隣の町々から掠奪行為など、何時襲撃に遭うとも限らない、慢性的な戦争状態が続いていた⁽²⁶⁾。従って強力な指導者⁽²⁷⁾がその共同体にとって不可欠な存在であった。しかしこの強力な指導者が、どこまで共同体成員に対してその役割を果たしていたのであろうか。

メッセネーの男達がイタケー島から、三百頭の羊を牧人ぐるみ掠奪していった。当時オデュッセウスは未だ若かったが、父親や他の長老達の要請により、取り立てに行っている⁽²⁸⁾。興味深いのは、メッセネーの男達の行為を「掠奪」ととっていいないことである。奪われたままであれば、彼らの行為は「掠奪」である。全体的に見て、メッセネーの *things* が増え、イタケーの *things* は減少した。しかしこのままでは終らず、オデュッセウスが派遣された。三百頭の羊と牧人をメッセネーの負債 (*debt*) ととり、国人 (*démou*) 全てを借り手とした。それはイタケー側の勢力の強さの証明であると判断する。オデュッセウスは奪われた *things* の回復のために、充分自分の *arete* を発揮したにちがいない。そ

れによってイタケーは *time* を回復し増大させることができた。この点から見れば、確かにオデュッセウスは立派な指導者であろう。だが、「求婚者ども」の殺害に対して、謀計によって彼は人々の非難をうまく回避している。オデュッセウス自身、「一人の男を殺した場合でも、その親族をばばかって、亡命するのが習いだが、国家の支柱という人々を殺した」⁽²⁹⁾のだから、どのように処置すべきかと、テイレマコスに相談しているところからみて、共同体にとって、殺害そのものは罪なのである。しかしながら、オデュッセウスとその一族にとっては、「求婚者ども」を殺害することに始めて、*time* が回復するのである。「国家の支柱」を失った度合と、オデュッセウスが帰還し、*time* も回復したその後にくるイタケーの平穩の度合とを秤にかけて、イタケーの平穩が優っていたにすぎない。自分の *time* の回復が先行し、共同体にとってどうあるべきかという事は、後回しにされたのである。一柳氏も指摘しているように、ホメロスの叙事詩における英雄達は、ヘクトールは例外として、私心を殺して人々を慮る立派な指導者とは言えないようである。⁽³⁰⁾ 掠奪に対しても、領主の息子が派遣されてその回復に当たるといふのは、最終的な段階であり、一人一人が各人の *time* を守ることが、まず第一に大事なことであっただろうと推察する。

各人の *time* はその人の *arete* によって守らなければならない。この場合、平民の *arete* とはどの様なものであろうか。

『オデュッセイア』において、求婚者たちの一人、エウリュマコ

スが、乞食の身なりをしているオデュッセウスに向かい、下男として働かないか (*thizeumen*) と誘っている箇所がある。⁽³¹⁾ これは衣服や食料を支給される家内奴隷であろうと考えられる。その際、エウリュマコスは次の様に罵って言っている。

いかさまるくでもない業ばかり覚えたからは、仕事にいくの／などは嫌いで、邑や町じゅう物乞いしながら廻って歩き／たいのだらうな、いつもがつが胃の腑を食わせにやならん
で。(XVIII, 362-4, 吳茂一訳、以下同じ)

家内奴隷の境遇と乞食の性根の違いが、不明瞭ではあるが、表されている。つまり労働をする者と、労働をせずに、他人の好意だけを当てにする者に対する人々の見方の違いが出ている。この誘いに対してオデュッセウスは、「今でこそ乞食の身なりをしてはいるが、私は農業や牧畜にも長けているし、戦場においては武勇を示し、よい働きをする」と、反論している。⁽³²⁾ オデュッセウスの父親、ラーエルトスは、田舎に引きこもり奴隷を使って彼らと共に農業に勤んでいる。また、オデュッセウスがエウリュマコスに対して、働き競べをしようと言っていることから、彼もその心得があることが伺われる。それ故、オデュッセウスの農業や牧畜、更に戦さにも秀れた者の像が、直接平民の理想像として結論することはできない。しかし彼が、領主や他の貴族達のイメージからその像を作り上げたとは考えにくい。乞食が召使いとして働かないかと誘われた。彼がそれに答える前に、誘った者は、乞食のままで働かず、他人の好意に頼って暮らす方が合っているの

はないか、と彼を蔑んだ。これに対して、「私は自分の土地と家畜を持ち、そしてそれらをしっかりと守り、*time*を回復したり増大させたりするのに発揮できる *brave* を持っている」と述べる時、むしろこれを「人々一般のあるべき姿、理想像」と解釈する方が、より自然であると考ええる。この様な見方は次の場合にもあてはまる。アルキノオス王の館に客人として迎えられたオデュッセウスに対し、競技を前にしてエウリュアロスが次の様に言う。

いや、とてもな、お客人、あなたは競技の心得のある御仁とは／見えませんが、これにもたくさん世間のうちには種類があるけど、「それより權受けのたくさんついた船に乗り、しげしげ海を往来する／水夫たちの親分として、仕事師などいう連中みたいにお見受けする、／積荷がいつも念頭にあり、帰りの荷物を狙って見張り、その儲けを／ががつ掻っ込む商売とでも、競技の達人らしくはないねえ。

(Od. VIII 159~164)

これに対してオデュッセウスは、自分は競技の心得を欠くどころか、一流の中に数えられると自慢し、秀れた弓の射手であるとも言っている。藤縄氏は、牧畜社会にあっては狩猟は貴族に固有のスポーツではなかった、と述べている。槍投げや弓の射手競技もまた、牧畜や農耕の合間に、人々の間で折りを見て行われたと推察する。エウリュアロスの言葉の重要な点は、オデュッセウスをいかなる共同体にも属していない、海賊と紙一重の海上商人と見ているところにある。共同体に属し、牧畜・農耕を営んでいる

人間であれば、何らかの競技の心得はあるはずだ、ということが彼の言葉の意味としてとれる。

競技においても、人々の *brave* は発揮される。そしてそれによって得られるものは *time* である。人々は牧畜・農耕に長け、戦場においては秀れた働きをし、競技を行えば一流であることを理想とした。周囲の敵から自分の家族の命はもちろん、土地や家畜を守ること、更に牧畜・農耕をよくし生産性を上げ、家畜を増やすこと、つまり *time* を維持し増大させることは貴族に限った関心事ではない。むしろ彼らよりも少ない *time* を所有する平民にとっては、彼らよりも一層切実な問題であったはずである。自分の *brave* によって、貴族よりも少ない *time* を所有する人は、社会的にはどの様な立場にあって、どの程度の力をもっていたのであろうか。

サルペドーンが戦いを前にして、「この中で自分達が荘園 (*teimēnos*) を受領し、人々から *time* を得ている (*teimēnēstha*) のは、戦時においては勇敢に戦うからである、それ故、我々は勇敢に戦おう」と、グラウコスを励ましている箇所がある。⁽³⁶⁾ 彼らは自分達に *time* を与えた人々のことを気にしている。アドキンスは *time* に関して、それは維持、増大させていかなければならないものであり、その様な義務感が、*time* という言葉にかかると「感情的負担」であると説明している。この場合、個人の内面の意識だけが「負担」となって現れるのではないと考える。サルペドーンやグラウコスは、*time* を人々から与えられているた

めに、生命をかけて戦わねばならない。与える側は *time* を与えることによってそれを彼らに期待する。

これに類するもので、グラウコスが自分の祖父についてディオメデースに語っている箇所がある⁽³⁸⁾。エビュレーの人、祖父ペロポネテースは、リュキエーにおいて怪物キマイラやソリュモイ族、それにアマゾーンの女軍を倒した。リュキエーの王は、彼を神の子の勇士であるとみなし、自分の娘と結婚させ、国の威権 (*time*) の半分を与えた。またリュキエーの人々は彼に荘園 (*temenos*) を切り取り与えた⁽³⁹⁾。王が威権の半分を与え、人々が土地を与えた理由は、ペロポネテースの力を抑止するためであり、*time* を与えることによって彼を味方に引き入れる方が得策であると考えたからではないかと推論する。結果として、彼は自分の *arete* によって *time* を得た。それと同時に「感情的負担」も負うことになった。孫であるグラウコスは、それ故にトロイアの地において戦わねばならないのである。

前にあげたオディュセウスがエウマイオスに偽りの身上話を語っているところで、自分は人々の総意 (*demou phemias*) に従って、イリオスの地へ行ったのだ、と述べている⁽⁴⁰⁾。この様に戦場に駆り立たせる人々の声は、期待であり、また時にはそれは要求に近いものであったらうと考える。

民衆の声は非常に強大であり、彼らの影響力は大であった。テイレマコスが召集した民会において、メントールは、求婚者たちの強慢ぶりに何の手出しもできないでいる市民達を非難している⁽⁴¹⁾。

藤縄氏は、「この様な民衆の無関心さは、ホメロスの時代の人々にとっては不自然な事であったという事を示している」と解釈した⁽⁴²⁾。同様に理解されるものとして、ネストールがテイレマコスに對して、イタケーの情勢について民衆がテイレマコスに加担してくれないのは、何か特別な理由があるからなのか、と尋ねている箇所があげられる⁽⁴³⁾。藤縄氏はこれについては、「王家や王権の問題に對して、民衆が積極的な態度を示さなかつたのは、むしろ例外的な事態であることを表している」と述べている⁽⁴⁴⁾。更に、テイレマコス暗殺の失敗が暴露され、その事が民会で明るみに出されたら、民衆が自分達を憎み国外へ追放するだらう、と求婚者たちが人々の声を恐れている箇所もある⁽⁴⁵⁾。以上、民衆の声がいかに強力であったかがわかる。

この様な強い影響力をもった人々が、サルベドーンやグラウコスに對して、戦場においては勇敢に戦うことを要求したと考えられる。多くの *time* を所有する者達は、それだけ人々の期待も大きく、要求も厳しいものであったと推定する。*time* に相応しい行動をする、勇敢に戦い、的を得た発言をする、この様な振舞いは、社会的な要求であり、要求された者達にとつては答えなければならぬものであった。この様な要求が強くなればなる程、それに答える側は行動を規制されていく。しかしいくらこの力が強くなったとはいえ、平民と貴族が逆転することはありえない。この時代は未だ民衆の個人としての発言権はないのである。民衆は民衆として始めて力を持つことができる。彼らは要求を強める

だけで、貴族の地位そのものをおびやかすことは、個人としては不可能なことであったと考える。彼らは貴族に *time* を与えることによって、貴族から奉仕を要求し、そうすることによって自分の *time* を守るのである。貴族の側にとっても、自分の地位を守る程度に奉仕するのであるから、この奉仕と要求のバランスがとれている共同体が安定した共同体ということになる。

(5)

アガメムノーンがアキレウスに対し、七つの都市を譲渡したいと申し出る際⁽⁴⁶⁾、彼はそこに住む住民の意志を考慮に入れていない。しかし今まで見て来たように、平民は貴族に対して、*time* に見合った行動をするよう要求するだけの力を持っている。アガメムノーンの言葉は、ホメロスの叙事詩における古い部分であろうと推定する。セウスより授かった *time* と強大な権力を背景とした支配の中では、*time* という秩序概念は、多くの *time* (財産) を所有している者が高い *time* (社会的地位) に就くという、一方的な支配者側からの概念となる。しかしながら、民衆の力が徐々に強くなると、それに従って、多くの *time* を所有する者達が、その *time* を維持するために、民衆に規制されるようになってくる。その状態は今まで見てきた通りである。民衆にとって *time* という秩序概念は、多くを所有する者が共同体においてそれだけの事を行わなければならないという考え方と一致する。

すなわち、*time* という秩序概念の強さは、より多くの *time* を所有している貴族への平民の期待や規制の強さであり、彼らからの奉仕の要求の強さであると考えられる。そしてその強さが増すにつれて、この概念は貴族よりもむしろ平民によって支持されていったと考えることができるのである。

註

- (1) Liddle & Scott, *Greek-English Lexicon, Oxford*, 1980.
- (2) 'Moira, themis und *Tyrif* in homerischen Denken' W. S. LXXIII (1960) pp. 5~39. 本稿に於いては、秩序概念の三番目のものとして述べられている *time* に関する部分 (pp. 35~39) を参考とした。
- (3) 'Honour' and 'Punishment' in the Homeric Poems', B. I. C. S., 7(1960), pp. 23~32.; "Friendship' and 'Self-sufficiency' in Homer and Aristotle", C. Q., XIII(1963), pp.30~45.; "Homeric Gods and the Values of Homeric Society", J. H. S., XCII(1972), pp. 1~19.; "Values, Goals, and Emotions in the *Iiad*", C. Ph., vol. 77 No. 4 (1982), pp. 292~326.; *Moral Values and Political Behaviour in Ancient Greece*, London, 1972.
- (4) W. Pötscher, art. cit., pp. 36~37.
- (5) むしろ後述してごまかした Pötscher は、*time* を貴族固有のものと理解し、平民はその様な *time* を承認したにすぎないと考えていたと推察する。それはホメロスの叙事

- 註のイウロ古く部分に力点を置いた見方であると考えを。
- (6) A. W. H. Adkins, "Honour" and 'Punishment' in the Homeric Poems", *B. I. C. S.*, 7(1960), pp.28~31.
- (7) *Il.* XV. 189, II. 197, I. 510.; *Od.* I. 117.
- (8) *Od.* VIII. 480~481.
- (9) *ibid.*, XIV 参照。
- (10) 本文の頁参照。
- (11) H. Ebeling, *Lexicon Homericum*, Leipzig, 1980 (1885).
- (12) *Il.* I, 279, II, 195~197.
- (13) Adkins, "Homeric Gods and the Values of Homeric Society", *J. H. S.*, xcII (1972), pp.12~17.
- (14) Adkins, "Honour" and 'Punishment' in the Homeric Poems", *B. I. C. S.*, 7(1960), p.28.
- (15) Ebeling は九例挙げているが、一例理解不能であった。
- (16) *Il.* IX, 648. 異文一説、引用を関つたは、同。傍写は筆者。
- (17) *idid.*, XVI. 59. 傍写は筆者。
- (18) *atimos* の比較級や最上級の語を『ヘーリック』で探すと一例のみあり。
- (19) *Il.* I. 171.
- (20) *Od.* XVI. 431.
- (21) *ibid.*, XIV. 96~106.
- (22) *ibid.*, XIV. 199~305.
- (23) *ibid.*, XV. 403~484.
- (24) *ibid.*, XV. 222~255.
- (25) *Il.* XXV. 34~79, XXIV. 751~753.
- (26) 藤縄謙三「キリシマ英雄叙事詩の社会的基礎」、『中央雑誌』第73編第9号(一九七四)(62頁~81頁)、『75頁参照。
- (27) 一柳俊夫「古代キリシマ人における罪と責任(一)」、『宇都宮大学教育学部紀要』第24号(一九七四)、『34~44頁。英雄達(本稿における貴族)は、『共同体全体の共同利害に対立する自己の特殊利害に依つて行動』する者達であり、『共同体のためは先頭に立ち、戦り個性を全く持たない支配者』ではなく(1頁)、『力強く』である。
- (28) *Od.* XXI. 15~21.
- (29) *ibid.*, XXIII. 113~122°
- (30) 一柳俊夫「前掲論文」、『5~8頁。
- (31) *Od.* XVIII. 357~364.
- (32) *ibid.*, XVIII. 366~380.
- (33) *ibid.*, XXIV. 205~411.
- (34) *ibid.*, VIII. 179~181, 214~233.
- (35) 藤縄謙三「キリシマ英雄叙事詩の社会的基礎」、『中央雑誌』第73編第9号(一九七四)(1頁~81頁)、『23頁参照。
- (36) *Il.* XII. 310~328.
- (37) Adkins, "Honour" and 'punishment' in the Homeric Poems", *B. I. C. S.*, 7(1960), p.29.
- (38) *Il.* VI. 145~211.
- (39) *ibid.*, VI. 179~195.
- (40) *Od.* XIV. 235~238.
- (41) *ibid.*, II. 239~241.

- (42) 藤縄謙三、前掲論文、第8号29頁参照。
- (43) *Oz. III*, 214~215.
- (44) 藤縄謙三、前掲論文、第8号29頁参照。
- (45) *Oz. XVI*, 375~382.
- (46) *Il. IX*, 149~156.